

おおやまと

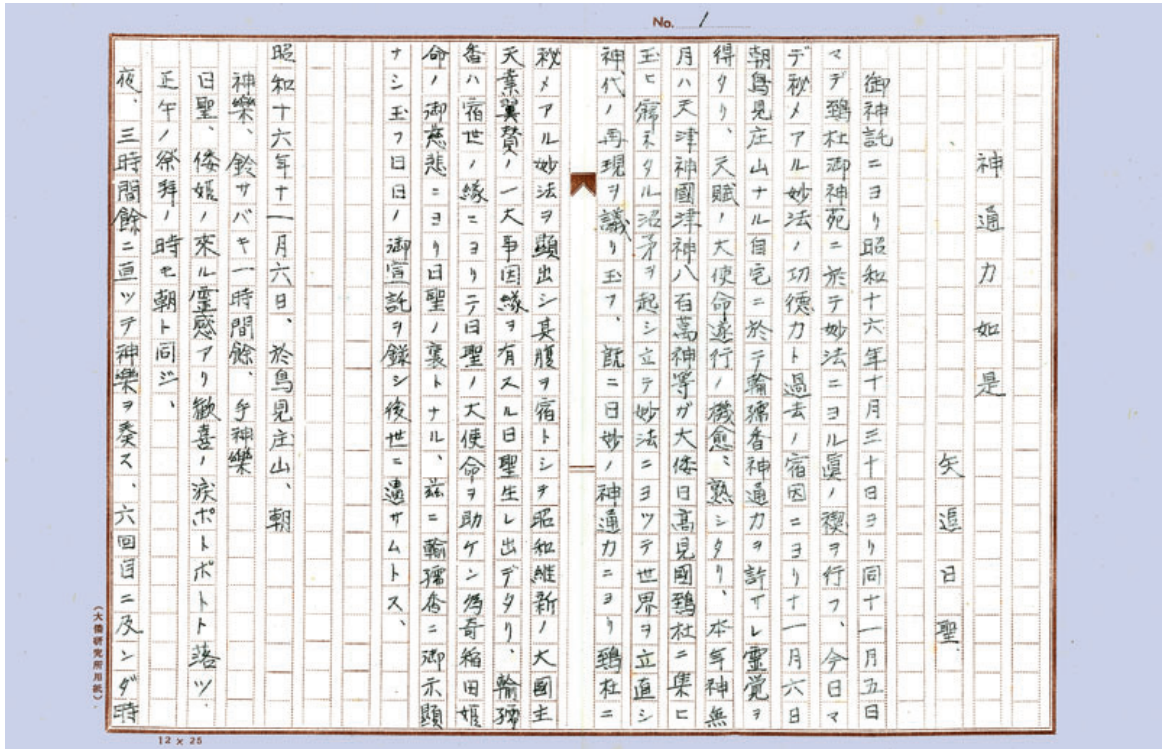
大倭出版局・大倭紫陽花色

令和元(2019)年
5月号

通巻585号
毎月23日発行

(題字 矢追日聖)

★発行日 令和元年5月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷製本
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



「神通力如是」法主様自筆の原稿

文・5頁

再録 『すさのお』紙より

庶民の生活に深く根ざした土着信仰 (全16回)

法主 矢追日聖

(七)

昭和43(1968)年5月23日発行

『すさのお』第20号より

(法主、満56歳)

「さわり(障)」とか、「たたり(祟)」とか、田舎などでは「かまい」とかいいう言葉を、日常、私達は聞くことが多い。つまりそれは人間以外の何か、例えば怨霊とか邪神とかといった種類のものに取られて、人間が苦しんだり不幸になるような場合に使う言葉のようである。

こうしたことに無関心である人達は、この文明の世の中で……、そんなことがあつてはたまものかと、極めて軽く押し流してしまふことだろう。

史蹟破壊の禍根

ところが、こうしたことの実在を信じている人もかなり多いことは事実である。

大倭の教域の中に今も畑の隅に小さい塚が残っている。耕作する者にとつては無かった方が好都合であるのだが、それには次のような理由があつた。数十年前、この畑の作人が、この盛土を引きながら畑を拓げるために鋤を入れ始めたところ、急に腹痛が起こり、その場で七転八倒の苦しみとなつた。命だけはかろうじて助かつたという。こんな場合に、これを頭から「たたり」と決定づけるのは早

計かも知れない。或いはこの時刻に腹痛が起きるべき肉体の条件になっていたのかも知れない。

またこんな場合もあった。もう三十年程前だが、私は私の所有地に新道をつけさせた。土師の破片が見えたので注意すると、奈良朝頃の陶棺の埋まっているのが見えた。工事は停止して家の出入りの人足を連れ、写真機や実測の道具を用意して現場へ赴いた。この人足というのは百姓で土方仕事もやっている、田舎では珍しい屈強で器用な男である。(※発掘時の陶棺がこの時の『すきのお』の表紙写真になっている。4頁の写真参照)

その男が私の指示に従ってゆるゆるとシャベルを入れ始めると、急に顔色蒼白になり地べたに転んでしまった。海老のように縮んでうんうんと呻いていた。腹痛のようだった。暫くするとじっとおさまるのだが、発掘させるとまた同じ状態になる。

二人の弟を手伝わせて私が掘ったのであるが、こんな場合は一概に偶然だと片付ける訳にはゆかない。この陶棺は今も私の手許に割れたまま置いてあるけれども、これと何のかわりがあるのかは知れないが、この棺からかつての怪僧、道鏡の姿が現われた。

靈感に弱い人間性

人々は家内安全、息災延命を願うのが普通になっている。神仏に祈るときは必ずこうした祈りの言葉を口にしていく。その反面、人々は、人間以外のものが目に見えない所から人間に災厄をもってくるようなことに対しては、本質的な恐れや弱さをもっている。

この災厄から守ってもらうために、目に見えない所にいる神仏にすがることが、一般的には信仰

だと思っている。換言すれば自分の安全を保つ意味においては、たとえ相手が狐狸の類であろうと、超人間的な靈感を感じれば、それがごとごとく神様だと考え、祀って拜んでその力を人間の都合のよい方に転向させるように努力する。つまりこうしたやり方が信仰と心得ているようだ。

こうした意味の信仰は、現在においても中々根深いものがあるので、これを巧みに利用さえすれば、下根下機と言われたような低級な欲の深い人々がわんさわさんと集まるので、世俗でいう有名な立派な一大宗教団体ができるのも、今の御時世では別段不思議なことではない。

この間、四月二十三日の月次祭に奈良の古市から中山武夫(六十四才)さんが珍しく顔を見せたので、十五年前のことを思い出した。昭和二十八年四月十五日、私が大倭神宮の祭典を終わって大本宮へ戻ると、彼は悲愴な面持ちでしょんぼり拜殿で待っていた。彼は井堰を切ったように、「六才になる私の一人児、光雄が一ヶ月程前T病院へ入院したところ、病状は日増しに悪化し、主治医は脳炎といい、最早生命の保障は難しい。よし命あるとしても恐らく廃人同様になるだろうと頭をかしげます。ここ一週間程はミルクを飲ませてでもすぐ吐き出してしまふ。今こうしていても、若しや死んでいないかと気がかりで落ち着かない心境です。どうか命ある児なれば神様のお力でお助け下さい」と切々たる親の願いであった。

みれば、昔に或る塚を取り除いて、その土地を屋敷にしたのが、今、彼の住宅になっているようである。その塚に葬られていた当時のかなり社会的地位の高かった人格霊が同時に現われた。

私にはうなずくところがあつたので、この由を彼に話してその場で鎮魂させた。勿論、顕幽にわたる祭祀である。それから四日たった十九日に、

彼は明るい顔付きで訪れてきた。鎮めてもらったその夜、子供が突如として腹がへつたと言出したので、恐る恐るミルクを飲ませたところ、不思議なことに納まって吐き出さない。

それからというもの日増しに快方に向かい始めたので、助けていただいた、有難いとただ感謝以外に何物もないと男泣きをして喜んでた。

光雄さんは本年で二十一才になり、健やかにして県庁で勤務しているのである。

今、世間では、高速道路の架設や造成住宅の工事等が各地で行われており、特に近畿地区では史蹟や古墳等もかなり破壊されつつある現状である。心の古里になる古代の文化財や史蹟を保存しようとする人々も多いが、また反面に時の流れに順応すべきだという人々もかなりあると思う。

だが高度な文化は、より多くの人々が幸福になるような根本的なものをもっていなければならぬ。古代の人々の心の安住の地である奥津城(墓)については、遺蹟保存といった面の外にも一考を要する重要な問題が含まれていることを知るべきと思う。

(八)

昭和43(1968年)6月23日発行

『すきのお』第21号より

(法主、満56歳)

津軽にある恐山のイタコや生駒山西麓に何百と集まっているおがみ屋群等を、最近各種の報道機関が取上げるようになったので、こうした問題がかなり巷の話題にのぼってきたのは面白い傾向といえる。

去る六月三日の夜と記憶しているが、読売テレ

びでイレブンPM「女の超能力」という番組のあったことは御存知のことと思う。私も茶の間で若い家子達とあれこれ語りながら熱心にこの放送を見ていた。その話の中で、有名人の死を予知したという北条きく子さんや飛行機の墜落事故や火災等を感じたという正司歌江さんらのこうした感能は、経験のない者にはただ不思議とか神秘的な力の持主とか、超人間的な神に近い人ではないのかなどと感じとる人も、視聴者の中にはかなりあったとも考えられる。

「超能力」という言葉はさほど感心はできない。ということばは、一般人には持ち合わせていない特別な能力の持主のような錯覚を与えるかも知れないからである。このような感能をもっている人間は、世界の人々の中にも沢山いる。

日本で見るとこの種の多くの人は、所謂宗教を表に出して教祖でおさまっていたり、神様から自分だけに与えて下さった神通力と信じ「おがみ屋」などを開業している者が多い。悪い意味での唯我独尊的な小天狗である。

ところがさきの二女性の体験談を話す態度の謙虚さには頭のさがる思いがして清々しく聞くことができた。よくちゃかしたり、お上品な冗談をぶつ飛ばす(大橋 巨泉さんも、さすがこの場は威儀を正すの感、なきにしもあらずといった雰囲気)のようだった。

霊能力は動物的本能

火災の前には鼠がいなくなる、蜘蛛が稲葉の先に巣を張る年は風は少ない。肉眼の届かない大海原を飛び越えてゆく渡り鳥、自分の病患を治す方法を自分で探し求めて治療する犬猫の類、羽根をもつ雀や足の早い鼠を食べる蛇、軒下の高い所を

飛び交う蜂を下から吸い込んで食べる蟻(ひまなま)わが巣に帰る伝書鳩、一滴の魚汁があっても食べないのに、お産の胎盤や汚血類一切を食べる牛等、挙げれば切りのないことだが、我々の身辺にあるこうした動物に見る知恵、またその能力は一体何と説明すればよいのだろうか。

地球そのものから、そして地上に実存している森羅万象の悉くには、それらを生成化育してきた自然の心、自然の力、そして自然の働きなどが備わっているものである。勿論人間にもこうした宇宙の根本的エネルギーが内在しているのであるが、時の流れが人間社会を複雑化してゆくにつれて、人類は人間がもつ知識を幸福な人間生活全般の主体であるかのように信じるようになった。

そうした頭脳の使い方が何千年を経るにつれて、脳の機能にかなりの変化をもたらしたと思う。つまり知識を司る機能が極度に発達して、自然からくる大知識を感応で受止めるほうが徐々に退化したため、知識以外で知る可能性を發揮する人を見ては超人間的な能力者、俗にいう霊能者として高く評価し、その人には盲目的に追従してゆくという結果をもたらしたともいえる。

こうした能力は、特定の人だけが具備しているものではなく、先程も挙げた例の如く鳥や獣に至るまでも遍ねく保持しているものである。霊能者や神憑りといえは何となく神に近き人とか、神秘的な能力者のように考える人もあるが、私なりに言うならば「動物的本能の発露」という一言につきるものに過ぎない。

霊能者と自己共に認めているこの種の人の中に、人格的にみて劣等な、常識にすら欠けている人々がいかにも多くあるかを知ったとき、自ずからうなずくところあると思う。天照大神が腹の中へ急に飛び込み、些細なことまでいちいちお指図があ

ると、幾万の信徒の前で公言するような教祖さんもあると聞いて、開いた口がふさがらない。ことにこれに関してはいかに無知蒙昧な人々の多きことが今更ながら驚かざるをえないのである。

自分の中に自然の心を見出そう

飯を食うこと、糞尿をたれること、空気を吸うこと、裸で生まれること、死んでゆくこと、異性が一つの褥で抱き合って寝たときの性的興奮を發して自ずから性交に突入すること、こうした事柄は普通の人々なれば誰でも分かっている至極平凡な経験である。ここで誰もが、我々に賦与された自然の心や働きなどが、よくもこれ程すべての人に公平無私であることに気付くだろう。そしてすべての人達が、こうした自然の心に何の疑念もなく素直に、いかなる理性もその効用を抹殺された形において追従している姿も見出すことであろう。

私は自然によって生かされているため、自然の心に、そのような生き方に、渾身の力をふりしほつて喜びを積み重ねながら日々を暮らすよう精進している。私は知能と霊能がうまく均衡を保つような脳機能を備えているように思うので、どちらかに片寄ることは難しい。けれど順序からいえば、霊能が先で、知能はあとという形になる。

我々人間が生きる条件を考えたとき、その根本的なものの大部分は自然の中にある。即ちそうした条件が整ったため、地上に人類の発生を可能ならしめた。我々の生きる努力は、ただ衣食住に限られていると思う。ただし自然の恩恵のもとでの努力に過ぎない点もよく心得ておかねばならない。退化しつつある先天的に備わる霊機能を進化させる訓練が、現在人には特に必要なことではあるまいか。(つづく)

現在、大倭に保存されている陶棺については、平成27年12月号「大倭大本宮 伝承の紀(三)」参照。



陶棺の発掘された付近では以前から事故や不幸事が重なって、法主様が波多社(はたむぢ)大善神の名で鎮魂(はらま)された。今も個人の屋敷内にあつてお祀りされている。

故見田暎子さん

追悼特集 (その2)

玄徳院の思い出

齋藤 正宏(福井)

旧大倭会館の裏手に、見田暎さんと高橋良美さんが治療院(玄徳院)を開いておられた双葉館という古びた建物がありました。路地伝いに成正坊さんのお社へ朝のご挨拶に伺うと、大きく開かれた窓越しに「お茶でも飲んでいきませんか」とお声をかけてくださった暎さんの姿が思い出されます。

当時の私は、高齢の祖父母と難病で寝たきりになった父の介護に追われる暮らしを送っており、年数回の大倭訪問は、私自身が家族ともども穏や

かに過ごすための禊ぎと息抜きの機会となつておりました。そこに玄徳院での治療が加わり、さらに文化行事や旅行への参加の機会も増え、様々な方々と出会い、生き方を学ばせて戴く機会を得ることとなりました。

こうした縁を通して、お二人が治療を終えた夜にお食事を呼ばれる機会も度々となりました。

そこでは、集った方々の生き方のお話に加え、お二人が法主さんとともに旅された佐渡や東北でのお話、最晩年の法主さんと間近で過ごされた際の日常会話、北海道の二風谷でアイヌのお婆さんと暮ら

しておられたときの逸話など、顕幽にわたる様々な方々との縁が語られ、お手製のご馳走やお酒も相俟つて、賑やかな直会の場となつておりました。

時に楽しすぎて、飲み過ぎてしまうくらいもありましたが、翌朝、大倭神宮のお掃除とご挨拶を欠かすことはありませんでした。楽しいことは大いに楽しむけれども、やるべき筋は頑固なまでに通す、暎さん流の生き方が偲ばれます。

暎さん、二十年余にわたる長いお付き合いとご教授、有り難うございました。

見田さん、だいすきです

水島 照美(兵庫)

見田さんに初めて会つたのは約20年前です。禊会の後、双葉館でご馳走になった帰りに「そうだ照美ちゃん。裏口は開けてあるからいつ来てもいいのよ」と見田さんに言われました。それがとても意味深い言葉のような気がして、この人は魔女に違いないと思いました。

それから5年ほど経ち、私は見えない世界の気配に気づき、頭の中が混乱でいっぱいになった時「裏口は…」の言葉を思い出して、仕事帰りに横

浜から奈良へ来たのです。会うのは2度目、それもいきなりの訪問にも関わらず、やさしい笑顔のダンディな良美さんが駅に迎えに来てくれました。大倭では見田さんがご飯を作つて待っていてくれて、お風呂も入れてくれました。うんうんとお二人が話を聞いてくれて、横からBOOがへんてこりんな話をしたりして。日本昔話の一場面のような、やさしくてあたたかなあの日のことは忘れられません。

私のことを「ちゃん」付けて呼んでくれる人が減るなか、いつも「照美ちゃん」と呼んでくれた見田さんは、私にとっては実の母よりも「母」を感じた人でした。人に甘えるのが下手な私ですが、思い返せばギリギリの時は、迷うことなく見田さんに電話したり手紙を書いていました。喜び悲しみを伴う人生の節目に何度も立ち会つてもらったこととなり、どれだけ心強かつたことでしょう。今生で、見田さんに会えたということ。本当にしあわせなことだと思つています。

私は文章書くの大好きです。でも今回は作文にとつともなく苦戦しています。だって、「だいすき」の一言だけで本当はいいんだもん。

見田さん、だいすきです。

内なる言葉を聞きたかった

出口 三平(京都)

最後に暎さんと会つたのは、昨年12月23日、日聖祭のときだった。祭典後、木洩れ陽のなかの拜殿入口の板縁で、夫君の高橋さん、岸田さん、林さん、齋藤さん、李さん達と輪になって弁当を開いた。暎さんが小生のお隣になり、この位置はなんだろうな…と、なんとも切なく有難い思いだった。秋に出会っていた林修三さんから見田さ

んのご病状はすでに聞いていたので、この世では最後かな…とも思ったが、まだお元氣そうだったから、あと一回は会えるだろう、すこしは話ができるかな…と、希望をもっていた。

映子さんとは、紫陽花邑では勿論のこと、沖繩・水俣・秩父・丹後・富士等々、各地で開かれた賑わい塾で、時には共にスタツフともなり、お世話になってきた。声を交わすことは多々あったが、彼女の肝心の内なる話をちゃんと聴いた感じがしない。やさしい配慮が詰まったお体がスーと動き、言葉は内に湛えたまま。それは私の中では不満なことだった。安保時代からはじまる青春時代のことや、その後の人生の岐路での覚悟や決意、そして矢追法主との出会いや、その後、大倭で深められた思いの数々。映子さんならではの内なる言葉の世界があったであろう。結果的には聞くことはできなかつたし、私が聞き取ることができたと思えない。しかしそのような言葉を湛えた見田さんの存在は忘れることはない。これから追悼集

じんずうりきによせ

「神通力如是」の真意をさぐる 第一回 大倭教の源流にさかのぼって

本年の本紙2月号で、『神通力如是』の紹介にさきだつて」という記事で予告したように、今号から法主様が記された昭和16年11月6日から同12月8日に行われた「神通力如是」と題された神語の記録の紹介をはじめます。「平成」から「令和」に変わったこの月に、大倭教の原点のひとつと言えるこの文書が表に出ることは大倭太加天腹の流れにとって大きな節目になることと思います。今回はまず、「神通力如是」の前文とも言える法主様による解説の文を紹介し、法主様自身の原稿の写し(今号の表紙写真)と、それを活字

などで記されるだろう彼女の言葉を今は楽しみにしたい。この世で出会ったご縁はありがたく、また双葉館では、友人たちと一緒に、ご馳走をたくさんたくさん頂いたこと、忘れません。ありがたうございました。

「死生観」を無言で伝えられた

松本 元嗣(奈良)

平成5年7月法主様の誘いで大倭病院での勤務が始まりました。大倭の地が初めてなので何もわからんから夕方になると鈴月かあさん、法主さんの住まいである瑞光院に顔を出して大倭の諸事情・人間関係・皆さんの悪口を教えて頂きました。そんな12月の末に鈴月かあさんが法主さんに喰つてかかるように攻め込みました。「神宮のお世話、どうするつもりなん？法主さん！誰も世話せえへんで！」「考えてんのん、法主さん？」いつもの調子で攻め立てる鈴月かあさんに沈黙

する法主さんの構図。一言、返事があつた！「手紙、書いた！」。それから数日後に見田さん高橋さんの姿を大倭で見かけました。

話を聞くと手紙を頂いた翌日に即、引越越し準備を進めて大倭に帰ってきたと話された。帰ったその朝から神宮のお掃除が始まりました。

神宮のお世話を頼むとの法主さんの手紙から25年間、彼女の顔には不平不満の表情はなく、名譽な仕事を授かったとのニコニコ笑顔での対応、切れの良い立ち振る舞いの姿が残っています。

彼女のお母さんの病氣末期のエピソードを何回か聞かされました。自分もそうありたいとの死生観、長生きするだけではダメ！「死生観」を持った晩年であれと。私に何かを教えたい生き様でした。亡くなられる数日前にお目に掛つた時、私の手指に掌を絡ませて彼女の「死生観」を無言で伝えておられました。長生きするだけが取り得じゃないよ！「死生観」を持つての人生であれ！と彼女に教えられた私です。

化したものをまず掲載します。ただし、原文は文語体で解りにくい面もあるので、現代語訳にしたものを添えておきます。多少説明が必要な語句や文章もありますので、三人の勉強会で検討した解説も付け加えていきます。ただし、それらはいくまでも一つの解釈ですので、読者の皆さんが異なる解釈をしていただくことで、この文書の理解がより深まることを願っています。

「神通力如是」全体は、かなりの分量がありますので、少しずつ本紙で掲載していくこととなります。これは神語りであり、今の時代から見ると

神通力如是(原文)

矢追日聖

御神託により昭和十六年十月三十日より同十一月五日まで鶏杜御神苑に於て妙法による眞の禊を行ふ。今日まで秘めある妙法の功徳力と過去の宿因により十一

月六日朝鳥見山なる自宅に於て輪孺香神通力を許され靈覚を得たり。天賦の大使命遂行の機愈々熟したり。本年神無月は天津神國津神八百萬神等が大倭日高見國鷄杜に集ひ玉ひ寝ねたる沼矛を起し立て妙法によって世界を立直し神代の再現を議り玉ふ。既に日妙の神通力により鷄杜に秘めある妙法を顕出し其腹を宿として昭和維新の大國主天業翼賛の一大事因縁を有する日聖生れ出でたり。輪孺香は宿世の縁によりて日聖の大使命を助けん為奇稲田姫命の御慈悲により日聖の裏となる。茲に輪孺香に御示顯なし玉ふ日日の御宣託を録し後世に遺さむとす。

(現代語訳)

神よりの御託宣によって、昭和十六年十月三十日から昭和十六年十一月五日まで鷄杜の御神苑において妙法によって真の禊を(私・日聖は)行った。今日まで秘めてあった妙法の功德力と過去における定められた因縁によって、同十一月六日朝鳥見山山の自宅に於て、輪孺香(日聖妻)は神通力を神より許され靈覚を得ることになった。(これによって)天から私に与えられた大使命の実行の機運はいよいよ熟してきた。

本年の神無月(十月)は、(鷄杜においては神有月であるため)天津神、国津神、八百萬の神等が大倭日高見の国の鷄杜に集まられて、寝ていた天の沼矛を起し立て、妙法によって世界を立直し、神代の再現が成る様に相談をされた。

(三十年前)すでに日妙の神通力によって鷄杜に秘められてあった妙法を世にあらわし、日妙の腹を宿として、昭和における維新を行う大國主(すなわち)天が行われる仕事を助けるという天

命を受けた日聖が生れて来た。輪孺香はこの世の定められた因縁によって、日聖のその大使命を助ける為、奇稲田姫命の御慈悲により日聖(表)の裏となったのである。ここに輪孺香に御示しになった日々の御託宣を記録し、後世に遺すものである。

註 釈

- ① 矢追日聖 法主の戦後(昭和20年8月14日)までの本名は矢追隆家であるが15歳ころより、靈界からは「日聖(ニッシンヨウ)」と呼ばれていた。正式の改名は昭和23年8月14日の届出からである。昭和16年の著述としての矢追日聖の署名は「神通力如是」が唯一のものではないだろうか。戦後何十年たってからも法主の竹馬の友・岸田栄三郎氏が紫陽花邑に来られた時はいつも邑人に「たかいえはん、おるか」と声をかけていた。法主も岸田氏を何時も「えーだはん」と呼んでいた。
- ② 御神託 神の託宣。神のお告げ。大倭神宮での神有月の神議りによっておろされた託宣と思われる。
- ③ 昭和十六年十月三十日から…同十一月五日まで 法主自ら大倭神宮にこもり神懸かりして真の禊(大倭太加天腹からの使命を授かった)を行った期間。
- ④ 真の禊 『広辞苑』では、禊とは身に罪または穢れのある時や重大な神事などに従う前に、川や海で身を洗い清めることとあるが、法主はこの事を「水かぶりミソギ」と擲擧げされている。『加美のまにまに』では、自己の本霊を覆っている枉罪(まがつみ)を祓い、神のお徳をいただくこと。「つみそぎ」と「みいずそそぎ」が一体となってきた大和言葉とある。

- ⑤ 妙法の功德力
 - ・ 妙法…：サンスクリット原語はDharma(法)に正(正しい)、善い、真の意)が冠せられたもので、すでに法句経などの原始經典に見えており、多くは(正法)と漢訳され、法華経の題名も竺法護訳は(正法華経)、後に鳩摩羅什訳では(妙法蓮華経)と訳される。
 - ・ 功德…：善根を修することにより、その人に備わった徳性をいう。
- ⑥ 過去の宿因 現世に影響を及ぼす前世からの因縁。
- ⑦ 鳥見庄山 地名。昭和13年末に矢追家が大倭神宮の地より富雄村大字中庄山(現在の奈良市中町455)に住居を移して以来、昭和22年10月30日に須加の聖地(現在の紫陽花邑)に遷るまで、法主一家はこの庄山の実家に住んでいた。「神通力如是」の神語りの主要な舞台はこの「鳥見庄山」である。
- ⑧ 輪孺香 成川静枝(大正3年10月2日生れ)のことで、昭和11年3月11日に法主と結婚。結婚後、矢追妙月と改名。法主が隆家と呼ばれていた時代であっても靈界からは日聖と呼ばれたように、妙月もまた靈界から輪孺香と呼ばれたとのことである。昭和25年9月6日帰幽。
- ⑨ 靈覚 人に本来備わっているが、通常は自覚され得ない靈妙なる感性。自「本霊に通じる感性」。
- ⑩ 天賦の大使命 「天賦」というのは天から賦与されたものという意味で、生まれつきの資質のこと。「大使命」というのは「神通力如是」の

中で、後に述べられる法主の今世でのお役目。
 ⑪神無月 陰曆十月の異称、全国から神々が出雲に集まるため、諸国に神がいなくなる月という意味である。一方、大倭の霊界では大倭神宮に神(霊界の人格霊)らが集まるということ。「神有月」といわれる。
 ⑫寝ねたる沼矛 古事記の神世七代にある伊邪那

タイトル「神通力如是」について

最初この法主自身がおつけになったと思われるタイトルを拝見した時、奇異に感じたのを感じている。それは「神通力」という言葉に対するいささかの違和感だったのかもしれない。ところが数年たったある日、私が以前メモしていた手帳を見直していた際、その思いが氷解していった。それは平成26年、佐渡ヶ島で「賑栄い塾」主催の会があり、その講師の一人として私がおこがましくも「佐渡の日蓮」について語った時のレジュメ作りの過程で認めていたものだった。そこに正しく「神通力如是」なる文字が記されていた。それは法華経全28巻の内、その真髓ともいえる第16巻の「如来寿量品」の「自我獨」の中にあつた。
 「我見諸衆生 没在於苦海 故不為現身 令其生渴仰 因其心恋慕 及出為說法 神通力如是 於阿僧祇劫 常在靈鷲山 及餘諸住處」
 「私がもろもろの生ける者たちを見るに、苦しみの海に沈みこんでいる。それ故に身をおこさずわすことなく、かれらに渴望する心をおこさせるのだ、その心に恋慕して切に会いたいと思ふとき姿をあらわして教えを説く。私の神通力はこのようなもので、無数劫のあいだにわたり、常に靈鷲山およびその他もろもろの場所に在

岐と伊邪那美の二神に天の沼矛が授けられて国生みの仕事を行なったという神話があるが、その沼矛が寝てしまったという神話があるので、再び沼矛を起して世直しをせよという寓話。矛は男根の形も表し、寝ねたる沼矛とは活動期に無い時の男根の意。
 ⑬妙法によって世界を立直し神代の再現を議り玉

る」

の一文である。つまり、ここで説かれている「神通力」とは、苦海に沈み苦しむ私達衆生を救う為の力という事になる。そしてその事は又、「神通力如是」が今までよりさらに深く法主の教えを渴望する人々の為に残された大切な書である事を意味しているものだろう。

また、それに続く「常在靈鷲山 及餘諸住處」の一文は、法主の「現身はよし かつとも永久に 結ぶ心のかわるものかは」との御言葉に一脈相通じるものと思われる。

「神通力如是」は神語りの書であるという点では論理的な面は希薄である。そしてまた、その中には幾つもの物語が錯綜してあらわれてくるのだが、これを通して見てみる時、そこに不可解ながらも幾つかの因縁譚が語られているのがわかる。因縁という難解で、にわかには信じがたい、しかしとても大事な教えが、見事にわかりやすく語り尽くされている。

長期にわたる連載とはなるが、読者の皆様には以上の点もふまえて、法主が名付けられた意味合いを考えながら読み進めていただければと思う。

今、78年の歳月を越えてこの一書が世に出る事の意義を深く受けとめたい。

(林修三)

ふ。大倭太加天腹の緻密な計画に基づいて、今の世界観を神代の「顕幽不二」の世界観に戻していこうと相談された。

⑭日妙の神通力 法主の母。日妙師の霊能力。法主はたびたびその霊能力を「世界一」と言われていた。

⑮鷄杜に秘めある妙法を顕出し 大倭神宮の霊界人達が長年に亘って秘めてきた計画や因縁を明らかにしていこうということ。

⑯昭和維新の大国主天業翼賛の一大事因縁を有する日聖

- ・維 新……物事が改まって新しくなる。
- ・天 業……大加美の事業。
- ・翼 賛……力をそえて助けること。
- ・一大事因縁……私が衆生救済のため世に現れるという大事。

⑰輪孺香は宿世の縁によりて 法主の妻であった輪孺香は今世だけではなく、過去世から続く深い因縁によって法主とつながっており、その具体的な因縁譚は後に語られる本文の主要なテーマとなっている。

⑱奇稲田姫 通常の日本神話の中での奇稲田姫命はスサノオノミコトによってヤマタノオロチの襲来から救われた姫としてのみ取り上げられているが、大倭では日本民族の大先祖である国津神として敬愛される重要な存在である。この「神通力如是」においても中心的な役割を果たしている。

あじさい日誌

4月15日 大倭神宮で箭賀祭が行われました。

大倭病院の元あじさい保育園を再活用するため教長さんにより三方荒神の清め祓いが行われました。

4月20日 午後、交流の家でFIWC定例委員会。現役学生が少ない、委員長不在になるという事で22人のOB・OGキャンパーが各地から集合。今後の活動と、当面3カ月一度の定例委員会を続けること等を話し合いました。

4月23日 大倭大本宮月次祭。この日は昭和42年4月23日の

法話をお聞きしました。(『おおやまと』紙に未掲載)。

東京墨田区の浅井克明さんが参加されました。

午後4時から大倭会館で大倭会幹事会。昨年度の会計報告及び新年度予算、文化講演会予定、一泊文化行事等について話し合われました。

5月6日 大倭神宮月次祭。

10連休の最終日、30人ほどの皆さんがお参りされました。教長さんが急なやむを得ぬご都合で遅れたため、祭典を皆で執り行う形になりました。

夜7時から大倭会館において邑倭の会が開かれました。

5月10日 社会福祉法人軽費老人ホーム大倭滝の峯荘(奈良市

千代ヶ丘)の48周年記念日でした。

大倭安宿苑では

4月23日 今年度第1回目の新入職員研修会。

5月10日 法人成立63周年記念日。安宿苑の守護神・成謙坊さんのお社でご挨拶の後、茂毛路園あじさいホールにて記念式典が行われました。30年1名・20年4名・10年8名が永年勤続表彰。各施設からも代表参加とご馳走メニューの昼食でお祝いムードでした。

(菅原園)

4月8日 希望者がイオンタウンで買い物。その後富雄川周辺を桜見物ドライブしました。

(須加宮寮)

4月12日 書道クラブ。

4月25日 買い物会で、4名がイズミヤ学園前店へ行きました。

(長曾根寮)

4月22日(デイ)鯉のぼりの作品づくりをしました。

4月28日(特養)喫茶倶楽部あじさい。おやつはチーズケーキか季節の和菓子のどちらかを選択、懐かしい写真を観ながら「回想レク」をしました。

(茂毛路園)

4月30日 大きな声を出して、「ピアノでうたおう」。運動を取り入れた「茶摘み」や楽器を演奏しながらの「肩たたき」等は特に盛り上がりがありました。

(八重垣園)

4~5月 新しく入居された方に早く園での生活に慣れて頂けます様に!

また書道クラブで絵手紙が始まり、好評です。

シャッターチャンス!

令和と発表された4月1日夕方、氷雨の後、東の空に虹が出ました。



国際ゴルフ場バス停付近で中島武宣さん写

あんない

*月次祭(大倭神宮) 6月6日(木) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催第605回祝会 6月9日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。6月は12月とともに大祓ぎの月です。

*月次祭(大倭神宮) 6月15日(土) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大本宮) 6月23日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

編集後記

▼「令和」が始まる月に「神通力如是」の連載を開始することになりました。昭和16年に法主様によって書かれたこの貴重な記録が、大倭の宗教の源流をより深く理解する上で重要な鍵になる予感があります。長丁場の断続的な連載になると思いますが、じっくりお付き合い下さい。

▼先月号から2カ月にわたって故見田暎子さんの追悼特集を組んでみて、強烈な存在感を放っていた方だったのだと改めて痛感しました。と過去形で語るよりも、今もここにいて全力で動きまわっている感じです。

▼帰幽された1月27日の夕方、連れ合いの高橋良美さんに頼まれてポータブルトイレをご自宅に運び込んだのですが、結局一度も使われなかったとのこと。つまり、ご自分でぎりぎりまでトイレに通い、おまけに前日には入浴も済ませていたとのこと。職業柄たくさんの方を見送った経験のある自分にとっても、こんな見事な方ははじめてでした。

▼その日退出する際に、暎子さんは穏やかな笑顔で「ありがとう」と言っていて掛布団の中から両手をハイタッチの形に伸ばしてきました。「えっ」と思い私も両手を合わせたのですが、それがお別れの挨拶でした。全力で駆け抜けた人生でした。(岸田哲)